

いぶき 17号 平成 24年 6月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第 16 回：孫文（1866～1925 年）

「ベルサイユ講和会議で、日本は五大国の一員として席に着いた。日本はアジア問題代弁者だった。他のアジア諸国は、日本をアジアの「先頭馬」として認め、その提案に耳を傾けた。白人人種にできることは日本人にもできる。人間は肌の色で異なるが知能に違いはない。アジアには強い日本があるから、白人人種はアジアのいかなる人種も見下すことはできない。日本の台頭は大和民族に権威をもたらしただけではなく、アジア全民族の地位を高めた。かつて我々はヨーロッパ人がすることは我々にはできないと考えていた。いま我々は日本がヨーロッパから学んだことを見、日本に習うなら、我々も日本と同じように西洋から学べることを知ったのである。」

（出典 安藤彦太郎訳『三民革命』岩波文庫）

孫文は、広東省の農家に生れ、13 歳でハワイに渡って西洋文明や西洋の思想に触れ、帰国後は医学を学んでマカオで医師として開業しました。しかし、腐敗堕落した清王朝がある限り中国の近代化や発展は望めないと考えるようになり、清朝を打倒する革命を目指します。彼は、広州で武装蜂起を計画しますが失敗し、1 年半の世界遊説後に日本に亡命しています。1911 年に四川省で鉄道国有化反対運動が起こり、これに便乗して武昌で反乱（武昌蜂起）が生じ、これに呼応する形でいわゆる「辛亥革命」が起こります。指導者の孫文は、秦漢王朝から約二千年続いた専制の帝政を廃止し、中国を人民の国家に導いたとして、中国では「革命の父」あるいは「国父（国家の父）」と呼ばれ尊敬されています。

孫文は「わが心が、これは行ないうると信ずれば、山を移し海を埋めるような難事でも、ついには成功の日を迎える。わが心が、これは行ないえぬと信ずれば、掌をかえし枝を折るような容易なことでも、成功の時は来ない。心の作用はかくも大きいのである。心とは万事の本源である。」との名言を残しています。（M. I）